

「札幌大学総合論叢」の刊行に寄せて

～教育改革、知的再生産への
推進力になることを念じて～

学長 木村 真佐幸

本学は、昭和42年4月の開学から30年の歴史を刻んできた。その道は決して平坦ではなかった。しかし全学の英知と関係者の努力によって幾多の困難を克服しながら、大学は社会の公器という使命感と情熱に支えられ、知的生産は言うに及ばず、個性と創造性豊かな3万余人の卒業生を世に送り出した。これも30年の足跡を裏付けるゆるぎない事実である。

ところで自明のことながら本学も変貌しつつある。その一つに、大学審議会の答申に基づく「大学教育の改善」の一環としての4年一貫教育——そのためのカリキュラムの編成、さらに具体的には教養部の改組転換、つまり各学部への再編である。

たしかに、戦後の新制大学の特色の一つと言われた、いわゆる一般教養と専門科目の区分は一応、姿を消した。だが、教養部が“解体”されたからといって4年一貫教育が確立したということにはならない。むしろ、その反省から巷をにぎわす諸問題を紹介するまでもなく、改めて教養教育の重要さが強調されていることも事実である。

わが国は現在、世界でもあまり経験しない高等教育の大衆化時代を迎えた。しかも、一方では国際的にも高度化する学術研究への比肩が要求され、はたまた出口の見えにくい現代社会の中で生き抜く根性と柔軟な思考能力と創造性、あわせて企業社会の即戦力にもなり得る人材の育成——これらの責めに応える多面的システムの再構築、そしてこれらが単に時流に乗った改革のつまみ食いではなく、歴史的評価にも十二分に耐え得るものでなければならぬだけに事は深刻である。したがって改革への不断の厳しい吟味と再構築——換言すると点検・評価の重要視点はこの側面にも凝縮しなければなるまい。

ところで本学は、先に触れたこれらの教育改革の一環としての教養部の再編に伴い、従来の「札幌大学教養部紀要」が「札幌大学総合論叢」へと発展的に解消し、変容した。したがって各学部、短大の「研究紀要」と共に本学の研究成果を世に問う重要な存在証明となることは言うまでもない。その意味からこの「総合論叢」は、「教養紀要」の表紙がえにとどまることなく、あらゆる分野の人々による文字どおりの「総合論叢」としてたくましく飛翔し、あわせて教育改革発展と知的再生産への大いなる推進力、牽引力となることを切にこいねがう次第である。